



Title	都市計画と市民生活
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Description	D016都市社会学原理 増補編関係
Citation	都市問題研究, 12(4), 3-18
Issue Date	1960-04
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77326
Type	journal article
File Information	D016_01_Part4.pdf



都市計画はその発展史の発端の頃から今日に至るまで農村生活への思慕を色々の形で忘れないで来た様に思う。嘗ての、そして今も無構想は生きて居る、田園都市の考えは勿論のこと、都市自体の整序の為に高速度道路や地下駐車場が建設されて居る現在においても、煤煙や騒音について考えたり人間性やコミュニティーの問題を論議したりして居る時、農村生活への郷愁はいつもつきまとい居る様に考えられる。けれども文化の巨大なる構造物として、人間のあらゆる巧みさをあつめ、殆ど思うがままに自然を制御して居るかに見える現代大都市においては、人間の大きな組織の大きな活動が多数集まってそれを運営して居ると思われるので、そこでは個人の生活も権威も大きな混乱の渦の中に埋没して居るかの様である。人の生命の尊さは瓦礫の一片、しぶきの一滴にも等しいものとなって居るし、又益々そうなりつつある様である。組織された人の力はどこまで大きな工作の力を自然と人生に与え得るものであるか、都市と現代はその限界を示さない。

改訂
都市計画と市民生活
都市化の理論
鈴木榮太郎

其

一 都市計画と農村への郷愁

鈴木 榮太郎

50

その絶えまなき都市発展の整序工作に追われつつも、忘れ得ないのが農村で見た生活のイメージの様である。煤煙や騒音のない青い静かな空と緑地、時間的空間的秩序を忘れて居るかに見える人の生活、合理打算のなさそのような関係、そして人間性ヒューマニティー豊かなようなコミュニティ。

都市計画の中に古い恋人の様に思い出される農村生活への郷愁は何を意味するか。又彼女への思慕は果して何を期待し得るものであるか、考えて見たい。社会学より追及して見る。

二 都市計画は誰の為か

「都市計画は誰の為か」と言う設問の前に「都市計画は何の為か」と言う設問がある筈である。それは「人の為である」と言う当然の答えであろうが、それには何の疑問も有し得ないとして省略されて居るのである。人の為であるとしても、具体的に如何なる人の為であるかは簡単には答えられない。その答えとしては一応次の様に考えられる。

都市計画はその都市に居住する正常人口の為に行わる可きものである。この答えはその都市に存する機関の為にではないと云う事、又そんな機関の所有者や経営者達の為でもないと云う事、及び異常人口の為でもないと云う事を意味して居る。又その都市に生活が依存して居る人々やその都市を生活に利用して居る人々の為でもない事を含意して居る。要約すれば、都市計画は第一に人の為に行われると云う事、第二に人の内その都市に居住する人々の為に行われると云う事、第三にその都市に居住する人々の内正常人口の為に行われると云う事、を認めて居るものである。

都市に住む正常人口と云ってもその都市への親近性は一様でないで、その差等を問題にする事も出来る。都市を

聚落社会として考え、結節的機関の特に加わって居る聚落社会として考えるなら、その成長に道を拓いて行く文化工作としての都市計画に一応右の如き事が云えるのは当然である。

けれども今日都市計画は都市の内に急激に増加し拡大して行く機関の発展の為に道を拓いて行く事に精一杯の様である。そして機関の発展と云う事は、所詮は人の為であり、特に文化発展の為に望む可き事であると云う考え方が無条件に認められて居る様に考えられる。機関の発展と今の様にそれが多数集まって居る事が文化発展の為に必要であるか否かは別としても、人間性の豊かな生活や愛情に恵まれた社会が機関の発展と平行して発展するのではないと云う事実はたしかの様である。そこに大きな問題がある。

けれども都市は生存競争の烈しい修羅場としてその時々勝った者本位に成長して来たのが、その近代史である。絶えず伝統を勇敢に振り切つて成長して来た近代都市の発展を見落してならぬ事も当然である。

けれども本来都市計画は生存競争の烈しい修羅場としての都市の発展をそのままに眺めつつその発展を唯々円滑ならしむる為丈に或いは寧ろその弱肉強食の闘争の場を整備する為に生れた一つの文化的工作ではなくして、この修羅場に幾分でも意識的な作意ある工作をほどこす事によって人間的な愛の蘇生又は成長を期待すればこそ生れた人間的な社会設計ではなかったか。資本主義社会の大車輪の下に見す見すつぶされて行くか弱い生命に対する愛情から出発した計画とも云えるものではなかったか。農村への郷愁もその為にこそ生れたものではなかったか。

けれども近代都市がまだ幼少であつた頃までは、人は都市計画に人間性やヒューマニズムを期待する事が出来た。けれどもこんな悠暢な考え方は、烈しい勢いで成長しはじめた現代大都市の実態やその成長の為に、場所を整えて行く事に精一杯の様に見える都市計画の実情を余りに無視した考え方である。現代都市の烈しい成長と云うのは具体

的には私の所謂機関の烈しい成長と増大に外ならぬ。機関の各々が益々成長し、又機関の数が益々増加し、その間の協力や競争や闘争こそが現代都市を愈々混乱し複雑にして居るものである。都市をうごかして居るものは、個人の単独の力ではどうにもならぬそんな大きな色々の組織体である。機関は年毎に増加し年毎に増大して居る。年毎に増加増大する機関の発展に備えてその健全な発展の道を造成すると云う事丈で都市計画は懸命の様に思われる。そして機関の為と云うも要は人の為であると考えるのが常の様である。問題はそこにある。機関の為は無条件に人の為であると云えるか。

都市計画は何の為かの設問の第一の答としてそれは人の為であると云う答はやはりそれ程当然の事ではなく矢張り吟味する必要があつたのである。

機関と人とは別の性格のものである。機関の為と云う事と人の為と云う事とは別の事である。それを混同すれば色々の誤解が大きくなる。機関の為はどうして人の為でないか、都市化と云う現象の理解は何程かそれに答えて居るであらう。

三 都市化の理論

都市化と云う現象は本来農村社会が都市社会の性格を加えて行く過程に名づけて理解されたのであるが、今日では都市に都市性とも云う可き性格が増加して行く過程をも都市化として理解されて居る。都市性の増加して行く現象が都市化に外ならぬ。都市性をその上加えて行くところが村落であらうと都市であらうと都市化の現象には変りない。村落の上に少しの都市性が加わってそれが小さな都市的存在となり、更にその上に都市性が増して行くにつれて

中都市大都市に発展して行く過程は具体的に観察する事が出来る。村落の理念型と都市の理念型との間に様々の段階が考えられ得ると共にそれを具体的に看取する事も出来る。かくて今日では都市は村落と連続した系列の上に理解され、都市と村落を別の世界としては考えない。

都市と村落の別は都市性の存否と云う事であり、都市の大小は都市性の量の大小であるから都市について重要な要素はその都市性である。けれどもその都市性を多く宿したり少し宿したり、全然宿さなかったりする母体をなして居るものは更に基礎的であると考えられ得る。聚落社会がそれである。都市と村落を一つの線上に考える場合、どうしても措定しなければならぬ概念として生れたのがこの聚落社会の概念である。

都市性の全然見られない聚落社会が純村落でその聚落社会に都市性が加わって行くにつれて高度の都市となる。ほんの僅か丈都市性が加わつては居るが都市とは一般に認められない段階の聚落社会が存し得るのは当然であり、又事実そんな聚落社会を現に見る事も出来る。準都市がそれである。準都市にも色々の段階がある。準都市が都市と呼ばれる段階に達する基準は民族と時代によって異って居るであろう。都市がその都市性によって様々の段階を有する事は当然である。都市性は聚落社会の上に限りなく重積され、それによって都市は限りなく高度の都市となり得るものである。

然しどんなに多くの都市性が加わっても、聚落社会がその為に圧死する事は有り得ないのである。歴史はまだその段階を示しては居ない。けれども都市性の激増によってこのままでは聚落社会が圧死するに至るかにあやぶまれ始めた頃から都市計画は考えられ始めたものの様に思われる。

聚落社会は近接して居住する人々の間に成長した生活協力の為の地域的社会的統一である。歴史の長い長い間、人

類は一人残らず何れかの聚落社会に所属する事によって生活を保つて来たのであり、今日我々人間がもつて居るあらゆる文化は皆その内での生活の中に育成して来たのであると考えられる。その長い長い時間に比すればこの聚落社会の内に都市性と我々が認めて居るものが急増しはじめた時から今日までの時間は正に一瞬にも等しい。けれども、だからと云つて、それ丈都市性は都市には附加的のもの聚落社会は本源的のものと解すると云うのでは決してない。

聚落社会に都市性が加わつて行く現象を一般に都市化と呼んで居る。

都市化と云う事を私は次の様に解して居る。

- 一、聚落社会の上に社会的交流の結節的機関が加わつて行く過程
- 二、互いに面識して居る人々の社会に未知の人との社会關係が加わつて行く過程
- 三、人と人との間の社会關係に合理性と自主性の増して行く過程

凡そ都市化は右の三つの過程を含むものであると考えて居る。

右の三つの過程の内、第一の過程は具体的には住居の集合して居る中に結節的機関の営造物が割込んで来る過程である。結節的機関とは、国民生活における社会的文化的交流の結節となつて居る様な生業であり、一般的に非農的産業又は都市的産業と呼ばれて居るもので、今日の都市では多くの場合大きな生業協力を形成して居るものである。

人の大きな組織体で、その組織体は人の側から見れば職場である。この組織体は益々激増しその各々は益々強大となり、他の組織体との競争は愈々激甚を加えて居るのが現在の都市であり此傾向は停止する時がない様に見える。人は住居と住居での生活をかえり見る暇が少くなり、その日その日職場の為に奉仕する事に没頭する事が多くなつて行く過程である。

第二の過程は非面識者との社会的接触の増加して行く過程である。人が皆住居の中に又は居住を中心に生業を営ん

で居た頃は、住居が土地に定着して居たから、人が日々の生活の中に接触する他の人々は殆ど面識の人ばかりであつた。交通機関の発展して居なかつた頃の人の行動半径は当然に甚だ狭まかつたからである。産業革命が日本に波うつ

て来た前でも、都市である以上日本の町にも結節的機関はあつたのだし、店屋の店頭には見知らぬ人も買いに来たのであり、交易の文化も相当に進歩して居たのではあるが、都市化の躍進と共に、店頭に立つのは見知らぬ人が原則と

なり、大都市では職場も街頭も殆ど完全に見知らぬ人の世界となつた。交易の文化も躍進しなければならなくなつた。

第三の過程は第二の過程の当然の発展であつた。面識なき人々の間の、而かも自給自足力を失つた都市人口の生き

て行く唯一つの道は交易の原則に貫ぬかれた生活協力の方法以外には存しない事を、人は都市生活の始めから学びとりその後ずっとそれを発達せしめて来たが、近代における機関の激増と見知らぬ人との関係の激増と共に、愈々その

峻厳さは増して来た。そこでは、凡そ生業の座は交易の座であり、交易は冷厳なる合理によつてのみ秩序が保たれ、

そこでは一切の人間的な感情は放棄されなければならぬ事を原則とした。愛情のしのびよる隙は愈々少くなつた。社会的接触の激増と共に職場においては人は完全な計算器となる事を甘んじなければならなかつた。職場は多数の計算

器の組織的活動体となつた。

四 第一の過程

右の三つの過程は発生論的には右に述べる様な聯繫が認められるのであるけれども、これ等の三つの過程は同時に

我々の眼前で平行して進行しつつあると云う事が出来る。これ等の三つの過程について、都市計画技術者の諮問に答える意図ももちながら少し立ち入って考えて見る。順序上先ず第一の過程について考える。

ここでは先ず聚落社会と結節的機関が問題であり、具体的には住居と職場の問題であり、生活の本拠と云う事が最も重要な問題になる。

都市計画において人間性の尊重と云う事を問題にする場合、人の生活の本拠がどこにあるかを明確にして置く事は重要な事であるに相違ない。人の生活の本拠は住居にあると見る点においては、私は曾てこの問題に論及した時も今も異つては居ない。又聚落社会への帰属は人の生活の本拠によるものと見る可きであるとの見解も誤りではないとも考えて居る。

私が理解して居る生活の本拠とは人が命のある限り最後まで死守しようとするものである。「彼は卑劣な男であつた」と云われたくないと思う為に、一つの約束を死守せんとする場合の様な消極的な名譽心が命をもって守り抜く最後までの対象である人も多い事であらう。漱石の「心」では金と恋とがそんなものと思われて居る。けれども人が命の限り守り抜こうとして居るものは、自分自身の命、及び自分が一番近い人間又は自分の分身と考えて居る自分の妻や子の命である。それが極く一般の人の生活では、命の限り死守しようとするものである、この世の中で一番大事な一番愛して居るものである、と想定するのは無理であらうか。住居はそれ等の大切なものの集まって居るところ、故に一番大切なところと考える事が出来る。こんな考え方は、私は別に調査してそれを確認した訳ではないのであるから、この私の考え方に無理があれば私の住居観は根本的に誤つて居る。

妻子もなく財産も殆ど無いに等しい世帯主について考えるなら、彼の生活の本拠は彼自身の外には考え難い。此種

の人口が有業人口の最低年齢階層に現在増加しつつある傾向も見通し難い事実ではあると思うが、そんな存し得る様々の特殊な事情に関しては私は次の様に理解して居る。

生活の本拠の存在は本来主観における問題である。死守する程の価値を自分と妻子の生命に見出せばこそ住居に生活の本拠も認めるのであるが、それ程の価値を妻子の生命に限らず何者にも認めない人には生活の本拠などと大げさに云う事が寧ろ滑稽であらう。けれども妻や子やその他の家族と一軒の家屋の中に住み、その家族等とその家屋を要塞として協力して互いに生命を守り合つて来たのが、古くからの一般の人間の生き方であつたと見る事には無理はあり得ないと思う。ここでは住居は命がけで守つて来た正に生活の本拠であつた。人が皆誰も疑いなくそんな生き方で生活して居た時、近接して居住して居た近隣の人に対しておのづから成長しなければならなかつた依頼と善意と協力の心が隣保性の基礎となり聚落社会形成の基盤ともなつたものと思われるのである。そんな社会的發展過程は文化の黎明に想像し得ると共に、今現に私等の身邊にも進行して居る。

今日生活の様々の事情や考え方の様々の傾向がある為に、死守する価値を認める対象も様々のものがあり得るし、故に生活の本拠も様々のものに考え得るであらう事は事実である。生活の本拠そのものの在存も無視されたり無関心になつて居る場合も多い事も事実であらう。けれども、生活にどんなに色々の新しい型のものが生れようとも、人の考え方に新しい型がどんなに多く現われようとも、聚落社会への帰属の關係の原則を一変させる程にそれ等の新しい傾向が多く且つ強く現われて来て居るとは考えられない。人の多数が死守する程の価値を認めて居る対象も、又それが存在して居る場所に対する本拠としての意識も未だ消え去つても居なければ大きな変質をおこして居るとも思えない。

聚落社会への帰属は生活の本拠の存するところによって認む可きであると言ふ抽象的命題は間違つては居ないと思ふ。今日の都市聚落社会への帰属の事実については私は実証的研究を試みた事もある。けれども凡そ聚落社会への帰属の意識そのものは、今日の都市住民に於いては明らかに鮮明なものではない。にも拘らず聚落社会への帰属を我々が問題にするのは、何人が事実上その聚落社会に深く関心を持ち、その聚落社会に何人が最も高い価値を認め、故に何人が最も強くその聚落社会を愛して居るかを明らかなる事は、聚落社会の正しい理解の爲にも亦聚落社会の指導の爲にも必要であると思われるからである。

職場を生活の本拠と見做すと言ふ考え方もあり得る。職場も住居の様に人が大事に思うものであるからである。けれども住居を大事に思うのは愛情の爲であり、職場を大事に思うのは打算の爲である。何か混同してならぬものがそこに存して居る様に思われる。次の第二及び第三の都市化過程の考察はこの点に対する理解を深めてくれるものと思ふ。

信
五 第二の過程

次に第二の都市化過程について考えて見る。面識者の社会に未知の人との社会関係が加わって行く過程である。近代化の進行と共に面識者の社会に未知の人の社会関係の増大が激しくなつて居る事は容易に認められる事である。農村の聚落社会内においても都市の聚落社会内においても一樣に此傾向は現われて居る。村落にも都市にも一樣に襲来して居る都市化の現象である。直接には生活の自由の拡大と交通の発達が促進して居るものと思われる。

今日の都市では人は何れかの機関に所属する事によつてのみ都市における生活の座席を最も容易に与えられる。こ

の傾向は年と共に顕著になりつつある。大きな機関には皆大群の従業員が一糸乱れぬ統制のもとに活動して居る。都市には多数のそんな大きな機関があつまり、皆互いに冷たい戦争をして居る。都市を動かして居るものはそんな多数の大きな機関であつて個人ではない。都市は人が動かして居ると云うよりも大きな機関が動かして居ると云う可きである。

機関は明らかに生業の協力体と云い得るものであるから、人の組織体と云う事も出来ない事はない。けれどもこの組織体の中に職場をもつて居る人達は機械として働いて居るのである。ほんとの機械がもっと安価になればそれに置き換えられる働きである。凡そ職場における人の働きは皆そんな性質のものである。

大きな機関に所属する何千人の従業員は殆ど皆互いに見知らぬ人である。然し機関は一団として活動して居るので従業員の一一人の行動も運命もこの一団の活動に依存して居る。機関との雇傭契約の事情の偶然の一致のみが彼等を一団としたのであり、全く未知の人々の間に無理に成立させられた協力体である。けれども彼等に求められる協力は機械でもなし得る協力以上ではない。それが人間の協力と異なつた協力である事はたしかである。

都市の街上には間断なく流れる人の波が見られる。その波は一つの流れとして動き一つの流れとして整理されて居る。都市に生活する者は日々この街の流れに加わらなければならぬ。

この大きな人の流れの中では、互いに自分を知つて居る人は一人も居ない。自分に対して個人的な関心をよせる者は一人も居ない。周囲の人が皆自分の過去を知り自分の体臭や自分の夢までも知つて居る村落とは全く別の世界である。

人の流れの内では、流れがその方向や動不動を決定し、自分はその流れに従つて居る丈である。流れの中で自分の

存在は水の一滴に等しい。

村落では人は皆自分に何かの意味で関心を持ち、少くとも自分に理由なくして善意のない者は居ない。都市の街頭では人は皆互いに全く無関心であって、少くとも理由なくして善意のある者は居ない。面識者の世界と非面識者の世界の別である。

皆人が互いに面識者であった村落での倫理では、義務は積極的に行い、権利は消極的に行う事である。そこでは社会的接触はあと味をのこすが常である。これ等の事は互いに関心をもち合い、それを持続して居る人の世界においてのみ可能である。

見知らぬ人の集まりの都市生活では、義務は消極的に行い権利は積極的に主張する。互いに他に迷惑をかけぬ事を倫理と心得、求める事も欲せず、求められる事も欲しない。協力はその場その場で清算され、あと味を残さない。

都市には自主性が成長して行かなければならぬ根拠がある。大きな機関の内でも街上でも、自分の存在は自分が主張しなければ顧る人は居ない。主張したり願ったりしない事は、都市では自滅を意味する場合が多い。

都市に住む者は、日々街頭の大群に加わり日々職場とする大きな機関の中で働いて居る。互いに見知らぬ人の中で人は皆自分の生活は自分で処理しなければならぬ。自主的が打算的に向うのは紙一重の発展でしかない。

都市は都市化の発展と共に、愛情の枯れた打算の世界になって行かなければならぬ事情が存して居る。

六 第三の過程

合理主義自由主義の生活態度に向う傾向が都市化の第三の過程に現われて居るが、結節的機関の導入と云う事が端

緒的現象である。見知らぬ人との関係の増加と云うのが、その次に現われる現象であり、第三の過程は更らにその次に現われる過程である。

都市と共に成長すると思われる合理性自主性は打算や自利の基礎となり感情や利他に対処して居る。都市人の眼にうつる農村人の態度が非打算的、非自利的である為、過分の美德が農村人に期待され易い。故に社会哲学者の中には農村は神が作ったところ都市は悪魔がつくったところと考える人もあった。その根拠には人の性善説がひそんで居る。都市は人の善の性質を墮落させるところと云う考え方である。ゲマインシャフトは本質意志による結合、ゲゼルシャフトは恣意による結合と見る考え方にも同じ様な人性観がひそんで居る。我々のもっと具体的な観察では、生業の座における人の心は合理的自主的にならざるを得ないし、その他の生活における人の心は情義的愛憎的でもあり得る。都市における生業は結節的機関となるもの多く、機関の座から人に接する機会が多い。都市生活がゲゼルシャフト的に見える理由はそこにあるに相違ない。生業の座から又は生業の座に関係する事なしには都市での生活は殆ど不可能である。

都市に合理性自主性が発展して居るのは、都市生活のアクセッサリーでもなく人間性の墮落でもない。あの大密居集落内で複雑な人間欲求を一人々々に充たさしむる為に出来上って居る複雑にして巧妙精微なる人間生活協力の組織は実に冷厳なる合理性自主性の原則の上に構築されて居るものである。人間が嘗て此地上に作り出した人間生活協力の一組のメカニズムとして最も優れた今日の大都市に見られる時間的空間的秩序の微に入り細に亘る精密にして巨大な組織を考へて見るがよい。各部局における運営が正常に行われて居からこそ維持されて居る秩序の組織であるが、この巨大なメカニズムにおけるほんの一部局における操作が一秒の時間的誤差があつても一廻の空間的誤差があつて

も直ちに何千人何万人の生活に大きな衝撃を与へる様な装備の存するところは都市内の方々にある。

社会関係における合理性自主性はこの巨大なる都市メカニズムの重要な底面をなすものであって、都市の成長と共に成長して行く人間関係の型と思われる。都市のこの基盤にある原理は都市メカニズムに必須の原理である以上、都市文化が曾てその上に芽生えた農村の郷土への郷愁が如何に忘れ難いものであらうとも、非合理的非自主的な古い村落での生活をそのままの形で復原する事は全く不可能である。

都市に集まって居る様々の機関は殆ど皆生産協力の組織体であり皆冷厳なる交易の原則の上に成立して居るものである。機関が大規模であればある程、機関における活動はヨリ合理的となりヨリ自主的となる。合理的打算的であればある程機関は愈々成長を早め愈々強大となるからであらう。

合理打算が徹底して行くと云う事は、それ丈多く感情より離れ人間性より遠ざかり愛情の世界を放棄して行くと云う事である。どんな残忍な事でも機関の名において平気でやって行ける機械となる事である。

今日都市に集まって居る多数の大きな機関はそれぞれ特殊の目的の為に活動して居る合理の組織体である。多数の人の手と頭脳がそれを動かして居るのではあるが、そこに働く従業員は皆正確で精巧な計算器に過ぎない。機関は多数の人の協力体と云うよりも、多数の精巧な計算機の組織体と云う可きである。忘れてならない事は、だから、機関の為と云う事と人の為と云う事とは同義ではないと云う事である。

都市の中に乱立して居る大小の組織体を動かして居る原理も都市の街上の人の波を動かして居る原理も共に都市メカニズムの一環として、それなくしては都市の秩序は一日も存し得ない原理である。それは峻厳な合理の原則である。

けれども人が作つた都市でありながら、人の心は都市の合理に窒息するかにあやぶまれる。都市はもう最後の壁に近づいて居る様である。

都市は成長して行くにつれて、人の生活は益々合理的・算的となり、人間性は枯渇し、それ丈愛の豊かな世界から遠ざかつて行く事は必然の運命の様である。特に現代における都市の急激な成長は病的な社会現象さえも産んで居る。

都市計画は、都市の群雄割拠の現状をそのままに放置す可きではない様に思う。都市計画は各都市別に行う可きではないのか。都市計画は、全国的見地より、都市の成長の速度や過大化を調節する計画としての使命をも持って居る可きであり、それが都市計画の最も重要な使命の様に思う。

既に述べた様に都市の発生や成長の根幹はそこに集まる機関である。機関の増大が都市化の端緒的事实である。機関の数を制限したり、機関の何種かを他の都市に移動せしめたりする事は、必ずしも不可能ではない。そうする事によつて都市の成長の急激さを緩和したり、過大となる事を抑止する事は明らかに可能である。

2倍

八

結

び

2倍

2倍

七

一

つ

の

期

待

2倍

あるが、出来上った右の答申の何と粗雑な理論の羅列である事か。私はそれをなさけなくは思ふけれども、都市計画が近代化の争奪戦の修羅場としての都市の為に闘争進展の道を整頓して行く丈の技術ではなくして、闘争の激化によって亡び去るかに見ゆる人間性の消滅を少しでも喰い止めんとする配慮をも右の整備作業の中に加味せんとするものであるならば、かくの如きその配慮に対してはかすかな声援と不充分な一つの意見書にはなり得るかと思つて居る。私はそれで満足である。

(東洋大学教授)